

岩手医科大学歯学会第31回総会抄録

日時：平成17年12月3日（土）午後1時より

会場：岩手医科大学歯学部6階第四講義室（C棟6階）

特別講演

矯正歯科治療と審美との関わりについて

八木 實

岩手医科大学歯学部歯科矯正学講座

矯正歯科治療の目標として、Tweedはすでに半世紀前に、単に歯並びを治すのではなく、顎顔面の調和のとれた構造、効率的な咀嚼機能、健康な口腔組織そして顔貌のよりよい平衡と調和をあげています。さらに現代では、良好な構音機能やヒトの健やかな心の獲得も矯正治療の目標になると考えます。そして目標のすべてが達成されたとき、審美的に満足できる状態になったといえると思います。

矯正歯科治療では、不正咬合について診査、検査、診断を行い、治療方針が確立した上で治療を進めていきます。治療方針は形態的問題を客観的に捉えるだけでなく、機能面での把握も大切です。これら形態的と機能的情報をまとめ、さらに患者個々の成長発育の状態や矯正力を加えた時の生体反応、用いる矯正装置や治療時期などを検討し、予後を推定した上で診断を行い治療計画を立案します。その中には、患者の心理の変化や治療で審美の捉え方をどう考えるのかなども考慮した上で、個々の患者で調和を計らなければなりません。

また、不正咬合は、う蝕の発症誘因、歯周疾患の誘因や発音への影響などは言うまでもありませんが、歯並びや咬合の悪さが個人の心理面に影響を及ぼす可能性があります。とくに成人では顔貌に対するこだわりが強く、日常の社会生活に影響をもたらしている場合もあります。

このように、審美については単に静的なものだけではなく、機能面からの動的な審美について検討する必要があります。すなわち、顎顔面は日常生活の中で様々な表情や感情の表現を行い、さらに複雑な外的刺激を受けそれに対して反応する動的な状態を持っています。そのため心理的な問題も含め、静的だけでなく

動的な審美も矯正歯科治療の上で考慮することが大切であります。

一般演題

演題1. 先天性心疾患根治術前患児の全身麻酔下での歯科治療からの一考察

○角田 初恵, 浅川 麻美, 曾根 信哉,
松本 弘紀, 田中 光郎

岩手医科大学歯学部小児歯科学講座

目的：近年の医療技術の向上から、先天性心疾患をはじめとした有病児の延命率は飛躍的に上昇している。それに伴い、多岐にわたる病状を持つ有病児が小児歯科外来に訪れるようになった。最近我々が行った実態調査によると、有病児のう蝕罹患率は健常児に比べ高い傾向にあることが分かった。そこで、感染性心内膜炎予防のため、重症う蝕治療を全身麻酔下で行った先天性心疾患を持つ2患児を例に、今後の有病児への歯科的対応を考えたい。

症例1：2歳8ヶ月の男児。疾患は、心室中隔欠損症、大動脈弁逸脱と両側性難聴である。う歯は20本であった。SpO₂は空気呼吸下で98%である。

症例2：2歳9ヶ月の女児。疾患は、心室中隔欠損症、心房中隔欠損症、両側上大静脈である。う歯は13本であった。SpO₂は空気呼吸下で80-85%である。

両患児とも先天性心疾患を有し、歯科的に非協力的な低年齢であり、小児歯科外来での意識下での歯科治療が困難で、また、身体抑制による歯科治療はリスクが高く、遠方のため通院が困難なことから、早期の根治術が望まれることから、全身麻酔下にて歯科治療を施行することにした。両患児とも、う蝕治療とその後の心疾患根治術は満足のいく状態で終了した。

結論：両症例とも、感染性心内膜炎予防のため、根治術を遅らせてのう蝕治療を行った。う蝕は当然ながら予防できる疾患であるし、今後は両症例のような、う蝕が全身疾患治療の妨げになるようなことは皆無し